

上原 美術館 通信

No.
25

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2024年4月12日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp





①二天像 (平安時代・12世紀) 上原美術館



②二天像 (江戸時代) 河津町・普門院



南町桑原薬師堂伝来で、現在のはかなみ仏の里美術館に収蔵される鎌倉時代の像など傑作ぞろい。

一方、本展で展示する三島市安久、長福寺の像はどうでしょう。甲冑で身を固めているものの、体に比して頭部が大きいさまは童子を思わせ、西神将(画像③)などは、鶏の被り物をいただく愛嬌ある姿。思わず頬が緩む造形です。



③十二神将像 (西神将、江戸時代) 三島市・長福寺

上原美術館の薬師如来像は、洗練された上品な姿。像底にはめ込まれた底板に「京仏光通東洞院南入(中略)宝永四年亥二月九日/大仏師西村主膳」の修理墨書があることから、かつては京都に伝えられたと考えられる、いかにも都風な仏像です。一方、下田市吉佐美地区の毘沙門天像の造形は素朴で荒削り。この二つの像の年代は、さほど離れていないと思われますが、造形感覚は全く異なります。

本展は、上原コレクションの、いかにも都風の仏像や古写経と、伊豆に伝えられた、素朴で拙くすら見える半面、親しみやすく、魅力的な仏像をあわせて展示するものです。仏教美術の多様で豊かな「祈りのかたち」をご覧ください。(田島)

六世紀、日本に伝えられた仏教は、日本各地で、風土や人々の営み、祈りに応じて、多様な仏教美術を開花させました。上原美術館は、優れた仏教美術を収集してきましたが、その多くは天皇や上皇、貴族や武士の発願によってつくられた、上質で、造形的に整ったものです。上原コレクションの仏像や古写経は、全てが都で制作されたものではありませんが、各時代の有力者に関わるもので、正統な都風の色濃く示すもの。本展ではこれを「都の祈り」と表現し、展示いたします。

一方当館が伊豆の調査で出会った仏像は、平安や鎌倉時代の像は不思議なほど都風でしたが、時代が降るにつれ、人々の生活に寄り添うような、素朴な姿となっていきます。

上原美術館の二天像(画像①)は、平安後期の等身大の像。甲冑を身に着けた太い体躯、怒りの表情は巧みで、専門仏師の作にふさわしく、たくましく屈強な戦士の姿です。一方で、河津町の普門院の二天像(画像②)は、江戸時代の像。瞳を見開き、やはり甲冑で武装しますが、腕の上げ下げはどこかごちなく、ガラスの玉眼がぎょろりと光る顔もユーモラス。踏みつけた邪鬼はまるで怪獣のようです。二天とは、四天王のうち広目天を除く三尊から二体を選ぶ像で、寺院の中門や、本尊の左右に配して、寺や仏、仏教徒を守護する仏です。上原美術館の二天も普門院の二天も同じ仏像。甲冑を身に着け、邪鬼を踏まえるさまは全く同じですが、その造形は大きく異なります。

二天と同じ天部の守護神に、薬師如来を取り囲む十二神将がいます。十二神将像といえば、烈しい怒号が聞こえてくるかのよう迫りに満ちた姿の奈良時代の新薬師寺像、伊豆では函



ポール・セザンヌ《ウルピノ壺のある静物》1872-73年

「ものとは何か」。それは古来より哲学者が向き合ってきた問いのひとつです。「もの」という言葉は、そこにあって掴むことのできる対象をあらわす一方で、それ以上の「何か」を含んでいます。画家たちは静物画を描くとき、ある「もの」を描きながら、その後ろに広がる大きな存在を見つめています。

セザンヌ《ウルピノ壺のある静物》は、布の上に置かれた果物と西洋トマト、色鮮やかなマヨルカ焼の壺が描かれています。壺は真正面から捉えられ、背景に大きな影を映します。右奥にあるカーテンは、模様が生き生きとした筆致で描かれ、布の上のモチーフと呼応するかのようです。再び果物や壺に目を移すと、それらは空中に浮かび上がるかのように不思議な存在感を放ち始めます。

セザンヌが本作を描いたのは30代前半。先輩の画家ピサロの影響を受けながら、自らの絵画を模索する時期でした。この



参考図版：ポール・セザンヌ《イタリアの壺》1873年 個人蔵
画像出典：Paul Gachet, Souvenirs de Cézanne et de Van Gogh à Auvers, Les Beaux Arts, Paris, 1928.
*本作は出展されません

頃、セザンヌとピサロはともに絵を描き、近くに住む医師ポール・ガシェの家を度々訪ねました。ガシェはパリのカフェで印象派の画家たちと芸術論を交わし、自らも絵や版画を制作するパトロンでした。自宅にはアトリエもあり、友人の画家を招きますが、そのガシェの家で描かれたのが本作です。セザンヌは本作と全く同じ構図の静物を、別の角度からも立体的に描いています(参考図版)。セザンヌはこのとき平面や立体を行き来することで、「もののありか」そのものに問いを投げかけています。そうしたセザンヌのまなざしは、間もなくリングが転がるような独特の静物画を生み出していきます。

セザンヌの「もの」への問いは、次に続く世代へ大きな影響を与えます。セザンヌが没した翌1907(明治40)年、20歳のときにパリに渡った安井はアカデミーで学んだ後、セザンヌに影響を受けた画風を展開します。滞欧期の作である《静物》は、安井様式と呼ばれるレアリスムの基礎にある「もの」へのまなざしを見ることが出来ます。

アンドレ・ドランもセザンヌの影響を受けた画家のひとりです。1905年、マティスとともにフォーヴの絵画を展開すると、間もなくセザンヌの影響を色濃く反映しながらキュビズムの絵画を展開します。ドラン《静物》もそうした時期の作品です。うつろう火の暗喩であるろうそくやたばこは、人生の儚さ(ヴァニタス)をあらわす伝統的なモチーフですが、光と影はそれぞれが独立するように振る舞い、不思議な存在感を見せています。タバコ缶の「TABAC」という文字は、陰影が生み出す立体に対して、平面的な緊張感を生み出し、「もの」とは何かという問いを投げかけます。

本展では画家たちが描く「もの」へのまなざしに注目することで、「静物画のふしぎ」に迫ります。画家たちが描き出す静物画の不思議な世界をどうぞお楽しみください。(土森)



安井曾太郎《静物》1912(明治45/大正元)年



アンドレ・ドラン《静物》1912年



河津平安の仏像展示館

3月15日、文化審議会は、河津町谷津区の南禅寺に伝来した26体の「南禅寺伝来諸像」(現在は河津平安の仏像展示館所蔵)を、国指定重要文化財に指定することを、文部科学大臣に答申しました。伊豆の仏像が新たに国指定文化財になるのは、平成4年(1993)、伊豆市修禅寺の本尊、大日如来像が重要文化財に指定されて以来30年ぶり。伊豆南部に限れば、大正9年(1920)、下田市蓮台寺地区、天神神社の大日如来像が旧国宝(現在の重要文化財)となって以来、1世紀ぶりの快挙です。

当館は、本群像の調査を長年にわたって行うとともに、多くの研究者の調査への協力を通じて新知見を蓄積、さらに当館の特別展に仏像を展示することを通じて、本群像と密接に関わってきました。南禅寺伝来諸像の重要文化財指定は、当館にとっても、大きな出来事です。

当館と南禅寺諸像との縁を結んでくれたのは、南禅寺を先祖代々管理されてきたという、板垣光彦氏(故人)です。板垣氏は、平成20年(2008)1月3日、当館を訪ねて来られ、諸像が地域の人たちに忘れられつつある現状を憂い、仏像が伝わる谷津地区の役員を集めて勉強会を開きたいと言い、筆者にその講師を務めて欲しいと依頼されました。

依頼を受け、筆者が南禅寺を訪ねたのは、1月28日の朝。実は筆者が南禅寺を訪ねたのはこれが初めてで、初めて実見した群像の素晴らしさに感動。その感動のままに、地区の役員さんたちに語りま

した。この日はとても寒い日で、集まってくれた方々は、早く帰りたい様子だったのですが、話が終わると、とても喜んでくださり、「そんなに凄い仏像だとは思わなかった」「地元之宝だ」「大切にしなければ」と異口同音に言ってくれました。その後、筆者は何度となく、地区の集會に呼ばれて話をする事になり、仏像を上原美術館の特別展に展示させていただきました。こうした中で、仏像群に対する谷津の皆さんの思いは大きく膨らみ、平成25年(2013)2月20日、老朽化した南禅寺本堂の傍らに、仏像群を末永く伝えるための、河津平安の仏像展示館がオープンするに至ったのです。

南禅寺伝来諸像は、26体からなる平安時代の群像ですが、他に現存する像のものではない23点の断片があり、さらに全国各地に当地から流出した仏像が存在します。このことから、南禅寺の群像は、当初は40~50体からなっていたと考えられています。また本尊とされる薬師如来像、四天王の一部と思われる2体の天部像は9世紀にさかのぼる可能性が高く、平安時代でもかなり古い像を含んでいることも重要です。

このような群像がいつ、どのような事情で造像され、当地に伝えられてきたのかは長い間明らかではありませんで

したが、当館では仏像が造像された9世紀から10世紀に伊豆で起こっていたことを精査。当時の伊豆周辺では832年の三宅島噴火、838年の神津島噴火、886年の新島噴火と、伊豆諸島の火山活動が活発化したことに注目しました。このうち、838年の噴火では、都でも、東方から鼓を打つような怪音が続いていたことが、当時の貴族の日記に記されています。この時期は、伊豆の神々への神階授与が盛んにおこなわれていたが、これは火山活動の鎮静化を祈ったと考えられています。南禅寺仏像群の造像背景にも、火山活動があったというのが、当館の試論です。

本群像の造像背景を、このように考えましたが、残された問題は多く、今後、様々な角度からの研究が必要です。また、この度の指定では、近年、奈良時代の可能性が指摘されていた十一面観音像が、奈良時代の像と評価されました。8世紀にさかのぼる木彫像は全国的に見ても少なく、特に東国では極めて稀です。都から遠く離れ、要地とは思えない河津の地に、なぜ奈良の像があるのか。新たな課題が提示された形です。南禅寺伝来諸像の研究は、まだ道半ばです。

当館は今後も、仏像を守り伝えてきた方々の思いに寄り添い、伊豆、そして周辺地域の仏像の調査と研究に尽力していきたいと考えています。



十一面観音像 (奈良時代、8世紀)



ポール・シニャック《アニエール、洗濯船》1882年、上原美術館蔵

2023年度、当館より収蔵品ポール・シニャック《アニエール、洗濯船》を、シカゴ美術館とファン・ゴッホ美術館(オランダ)にて開催された特別展『ファン・ゴッホとアヴァンギャルド:セーヌの流れに沿って』に出品しました。展覧会では19世紀末、パリ近郊のセーヌ川をめぐる画家たちの交流が紹介されました。

1863年、パリの裕福な家に生まれたシニャックは、16歳のときに父が急逝すると家族とパリ対岸のアニエールに移り住み、モネの影響を受けながら独学で絵を描き始めます。《アニエール、洗濯船》はシニャック18歳の風景画。パリの街がある対岸クリシーには煙突の煙が立ち昇ります。右側に見える構造物はガスタンクに石炭を運ぶクレーンの橋脚です。工場と田園風景が融合する近代的なモチーフはシニャックのみならず、多くの画家を魅了しました。古い絵葉書はそのときの眺めを甦らせます(参考写真①)。

シニャックより10歳年上のゴッホは27歳で画家を志してオランダなどで制作。独学でミレーの模写などを始めます。その一つが当館蔵の《鎌で刈る人(ミレーによる)》です。ゴッホはその後も暗い色調による作品を制作しますが、1886年2月、32歳のときに弟テオを頼ってパリに移り住むと、間もなく印象派のように鮮やかな色彩があらわれます。



参考写真①:《アニエール、洗濯船》とほぼ同じ場所から撮影された写真の絵葉書、1900年頃

翌1887年初め、23歳のシニャックと33歳のゴッホは画材店で出会い、初夏にアニエールやクリシーとともに制作します。シニャックは次のように回想します。「私はタンギー親父を通じてゴッホと知り合った。アニエールやサン=トゥアンでも会った。私たちは川岸で描き、ギャングレットで昼食を取り、サン=トゥアンやクリシーの通り沿いに歩いてパリへ戻った。ゴッホは青の労働服を着て、袖には色の点がついていた。彼は私のすぐ傍にいて、叫び、身振り手振りをして30号の大きなキャンヴァスを振り回し、自分や通行人に絵具をまき散らしていた」(Gustave Coquirot, Vincent Van Gogh, Paris, 1923.)。

アニエール近くに住む画家エミール・ベルナルもまたゴッホと制作しますが、ちょうどその頃の写真が残されています(参考写真②)。セーヌ河岸で椅子を並べて話をする二人。こちらを向くのはベルナルですが、背を向けるのはゴッホとされています。遠くに煙突の煙が見えるこの写真には、若き画家たちが芸術論を交わす制作の現場が垣間見えます。

シニャックとゴッホがともに制作したのは、わずかな期間に過ぎませんが、その後も二人の交流は続きます。1888年2月、ゴッホは南仏アルルに移り住みました。秋にはポール・ゴーギャンと共同生

活を始めますが、間もなく自ら耳を切る事件を起こします。その後、入院生活が続く中、見舞いに訪れたのがシニャックでした。二人は散策し、ゴッホが暮らした家も訪ねます。ゴッホは弟にそのことを手紙で報告しています。「シニャックに会ってとてもよくしてもらったことを知らせておきたい。(中略)

シニャックはかなり乱暴だと言われていたが、僕はとても冷静な男だと思う。落ち着いてバランス感覚のある人間だという印象を受けた。(中略)どうやら彼は僕の絵を見ておじけづいたりはないようだ」(ファン・ゴッホ美術館編、園府寺司訳『ファン・ゴッホの手紙II』新潮社、2020年、L.752.)。ゴッホはその後も意欲的な制作を続けますが、翌年には自ら命を絶つことになりました。

若き画家たちの情熱は、セーヌ川めぐって自由な絵画を生み出しました。その表現はいまなお私たちの心に新しい風を届けています。



参考写真②: クルブヴォワのセーヌ河岸のエミール・ベルナル(奥)とファン・ゴッホ(背を向けて座る男性)、1886-87年頃

参考写真の画像出典: Exh. Cat., Van Gogh and the Avant-Garde, Along the Seine, The Art Institute of Chicago, Van Gogh Museum, Amsterdam, THOTH Publisherse, Bussum, 2023.

ポール・シニャック《アニエール、洗濯船》とフィンセント・ファン・ゴッホ《鎌で刈る人(ミレーによる)》は、2024年4月27日から9月23日まで近代館にて展示予定です。

ギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会内容について、担当学芸員が解説を行いました。
 展覧会会期中は毎月第3土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催
 しています。開催時間になりましたら、各展示室へお集まりください。
 ※要入館券、詳細は当館ホームページ、公式SNS等をご覧ください。

授業入館

2023年12月17日 静岡県立松崎高校美術部
 2024年1月30日 下田市立下田認定こども園
 2024年2月2日 南伊豆町立南伊豆東中学校

松崎高校美術部は主に近代館で絵画鑑賞を行い、生徒が気に入った作品のい
 くつかを学芸員が解説しました。下田認定こども園は、絵画や仏像について
 学芸員が園児にお話しました。南伊豆東中学校は奈良・京都方面の修学旅行
 の事前学習で、学芸員が奈良・京都にある仏像の紹介や、仏像の見分け方な
 どを解説しました。

出張授業

2023年12月21日 静岡文化芸術大学
 2024年1月23日 河津町立河津中学校
 2024年1月26日 静岡県立稲取高校

静岡文化芸術大学は8月に博物館実習の受け入れを行い、12月には土森上
 席学芸員が博物館学の1講座を担当しました。河津中学校は奈良・京都方面
 の修学旅行の事前学習、稲取高校は1～2年生を対象に、実際に日本画材を触
 って小さな作品を作り、印象派について授業を行いました。

対外活動

2024年1月21日
 三島市立図書館講演「伊豆の仏像～三島市での調査報告を兼ねて～」
 2024年1月31日 静岡県博物館協会「袋井市 森町 史跡視察」
 2024年2～3月 伊東市、熱海市、下田市、富士市各文化財保護審議会へ出席
 2024年3月10日 静岡県博物館協会講習会「文化財救済と史料ネット」

三島市立図書館では田島上席学芸員が、三島市の仏像を中心に伊豆の仏像に
 ついてお話をしました。当日は約150名の参加がありました。また2～3月に各
 市の文化財保護審議会へ出席しました。静岡県博物館協会は土森上席学芸員
 が事業推進グループのメンバーとして参加し、袋井市・森町の文化財をめぐる
 視察会のほか、文化財救済についての講習会の運営に参加しました。

教室作品展開催

仏像彫刻教室作品展 2024年2月21日(水)～25日(日)
 写経教室作品展 3月5日(火)～9日(土)
 デッサン・水彩画教室作品展 3月20日(水・祝)～24日(日)
 日本画教室作品展 3月27日(水)～31日(日)

会場：各教室とも上原美術館アトリエ棟

当館が開催している教室受講生作品展を行いました。毎年1回、1年間の成果
 を発表するこの展覧会は、受講生の力作が多く並びました。



ギャラリートーク(上：近代館/下：仏教館)



授業入館 下田認定こども園



出張授業 稲取高校

特別展「伊豆仏に出逢う」
 図録発行のお知らせ

2023年度の特別展「伊豆仏に出逢う」
 の図録を発行いたしました。開館40
 周年を記念し、上原仏教美術館からの
 40年を振り返る記念誌になっており
 ます。特別展に出品した仏像の写真と
 解説、当館の40年の歴史をご紹介し
 たものを収録しました。通販など詳細
 はお問合せ下さい。
 (お問合せ：電話 0558-28-1228)

『親子で色あそび—透明水彩で』

当館アトリエ 2月4日(日)
 講師：小野憲一(現代美術作家/当館デッサン・水彩画講師)

2月4日、ワークショップ『親子で色あそび—透明水彩で』を開催し、5組11名の親
 子にご参加いただきました。ワークショップは、小野先生の丁寧なデモンストレーショ
 ンをみながら、作業を進めます。ここで使用する色は、赤、青、黄色の3色の透明水彩
 絵具のみ。各テーブルには、あらかじめ使いやすいうように水で溶いた3色の絵具ボト
 ルが用意され、この液状絵具を使用して、さまざまな色あそびを楽しんでいます。

なかでも、3色を混色して黒を作る作業では、わずかな量の違いで、さまざまな
 ニュアンスの黒が誕生し、初挑戦の参加者は「なんで同じ色を混ぜたのに、お母さん
 と違う色なの!？」と驚き顔でした。混色あそびの時間は、黒をはじめ、自分がパレ
 ットに作った様々な色を使って、色を重ねたり、水を多く含ませたり、自由に筆を走ら
 せます。小野先生に筆の使い方など教えていただきながら、水量により色の濃さに変
 化が生じることや、歯ブラシ、幅の広い刷毛を使うことで筆とは違う趣がもたらされ
 ることを楽しみました。また、ろうそくを使って、蝋をぬった部分がはじくことを利
 用した表現も試みました。

最後に、親子で協力して大きな画用紙1枚に描く作業では、大きな紙ならではの
 ダイナミックな表現が見られる一方で、繊細に筆を進める参加者もあって、実に多く
 の色彩、表現がたった3色の絵具から生み出されました。

『おとなの日本画体験』

当館アトリエ 2月12日(月・祝)
 講師：牧野伸英(日本画家/当館日本画教室講師)

2月12日、ワークショップ『おとなの日本画体験』を実施しました。ワークショップ
 には、中学生から70代までの日本画に興味・関心のある12名が集まりました。

はじめに日本画とは何か、どのような画材を使っているのか、講師の牧野先生より
 説明いただきました。絵具の原料となる鉱物や貝殻などの実物を用いた詳しい説明
 に、皆さん熱心に聞き入ります。説明を聞いたあとは、いよいよ制作の時間。まずは、
 牧野先生が実演を交えながら、制作のポイントをお話しくだけさいました。

ワークショップで制作する作品は、寸松庵色紙という小さな色紙を使います。この
 色紙へ下図を写し取る作業からスタート。下図は牧野先生にご用意いただいた見本、
 または自分の好きなものや風景を題材に使用しました。写し取った図をもとに、彩色
 していきます。日本画の制作では、岩絵具という粉末の絵具に膠(定着材)を溶いて、
 はじめて絵具として使用できます。1色ずつ絵皿に作るため、チューブ絵具より手間は
 かかりますが、日本画ならではの独特な色合いが岩絵具から生み出されます。ワーク
 ショップでは、日本画体験をできる限りしていただこうと、自分で使う岩絵具を絵皿
 で溶く作業も参加者に体験していただきました。牧野先生による細やかな助言、ご指
 導のもと、はじめての日本画制作に打ち込んだ参加者たちは、さらに日本画に親しみ
 を持っていただけたようです。

これらのワークショップは不定期に開催しております。参加希望者は、ぜひ美術
 館までお問い合わせください！ (土屋)

アンケートの声

- いろいろなどうぐでいろいろな
 絵、もようをかけて、すごくすく
 くのしかったです。また、きたい
 です。(9才)
- はぶらしてはくはつするよう
 なひょうげんができることがすご
 いと思った。(10才)
- たいへんたのしくお絵かきがで
 きました。大きな紙にすぎないで
 描くというのは中々できないので
 たのしかったです。(保護者)



アンケートの声

- 色々な日本画があることを知りま
 した。
- 先生が気さくに話しかけてくだ
 かったので緊張せず、楽しく進め
 る事ができました。
- 親切に楽しく教えて頂いて、興味
 がわきました。





美術館そばの河津桜に来たメジロ

今年の河津桜は2月半ばに満開を迎え、たくさんのお客様でにぎわいました。当館のそばに咲く河津桜には、メジロが花の蜜を吸いに訪れ、可愛い姿を見せていました。

春まっさかりのこの時期、館庭にたたずむと、さまざまな鳥のさえずりや姿を目にします。身近なカラスやスズメに始まり、イソヒヨドリやサギ、ツバメ、トビなど名前の分かる鳥のほかにもたくさん生息しているのでしょうか。

これから初夏に向けて、美術館を囲む山の緑もますます濃くなっていきます。新しい展示とともに、のどかな里山の風景もお楽しみください。 (櫻井)



崇高さに関する抽象的な覚書

広島市現代美術館 2024年3月30日(土)～6月9日(日)

広島市現代美術館で開催の「崇高さに関する抽象的な覚書」は、アーティストの田口和奈さんが着想、同じくアーティストの松原壮志朗さんが構成したグループ展です。本展はウィーンを拠点に活動しているお二人の直感と鑑識眼にもとづいて、しばしば「崇高さ」とも関連付けられる美学を現代的に考察する意欲的な試みです。アメリカの現代詩人ジョアン・カイガーをはじめ、アンソニー・カロや田中敦子などの現代作家の作品が展示される中、当館からは須田国太郎《牡丹》を出品します。時代やジャンルを越えた多様な表現が集まる場で、当館の須田作品がどのように展示されるのか、ご期待ください！ (土屋)



岸田劉生・北蓮蔵・曾宮一念——浜松ゆかりの洋画家——

浜松市美術館 2024年4月13日(土)～6月2日(日)

浜松市美術館では展覧会「岸田劉生・北蓮蔵・曾宮一念——浜松ゆかりの洋画家——」が開催されます。温暖な気候と富士山に代表される豊かな景勝地、そして東海道線の開通による交通の利便性から、静岡には多くの画家が訪れています。なかでも、江戸時代から綿織物産業で栄えた浜松には、当地を訪れた画家を経済的に援助した人々や、個展や画会の開催などで作家活動をサポートした人々がいました。本展覧会では、洋画家の岸田劉生、北蓮蔵、曾宮一念を取り上げ、彼らの画業と浜松の文化人との交流を紹介します。本展覧会に、当館からは岸田劉生《麗子微笑像》と《静物》の2点を出品します。

また、全国各地の博物館・美術館から貸出依頼を受けて展示された収蔵品の数々を紹介する「ひっぱりだこ展——全国行脚の浜美コレクション——」が同時開催されます。あわせてお楽しみください。 (土屋)